



# 教育思想史学会

## 第 27 回大会プログラム

---

2017 年 09 月 09 日（土） - 10 日（日）

武庫川女子大学

中央キャンパス 学校教育館

主催：教育思想史学会 協賛：武庫川女子大学

### 大会参加費

	一般	学生
会員	3500 円	2000 円
非会員	4000 円	2500 円

### 懇親会費

一般	学生
5000 円	3000 円

# 大会日程

## 09月09日(土)

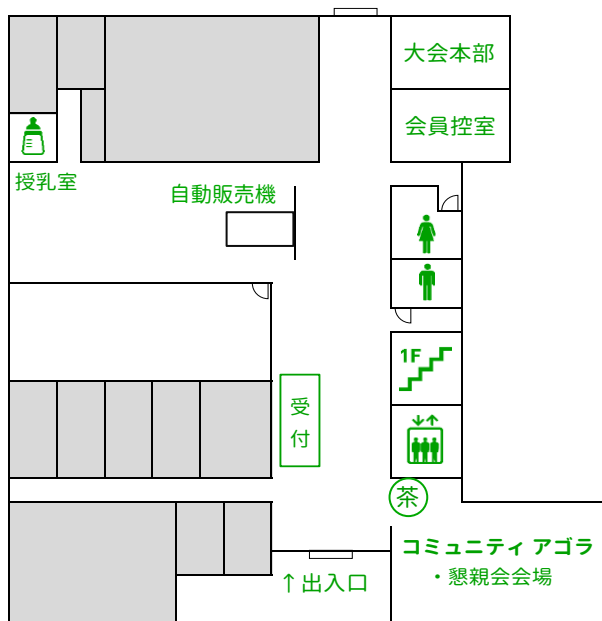
09:30 ~	受付 (エントランスホール：1階)
10:00 ~ 13:00	<b>コロキウム1</b> (301教室) 思想史と実践史を架橋する — 新教育研究への提案 —
	<b>コロキウム2</b> (302教室) 〈教育思想史〉の誕生(2) — ペスタロッチと英米教育思想史 —
13:15 ~ 14:15	第9期 理事会・編集委員会 合同会議 (205 会議室)
14:30 ~ 16:15	<b>フォーラム1</b> (210教室) 学校教育における道徳教育を再考する — 天野貞祐と高坂正顕の人間観から —
16:30 ~ 18:15	<b>フォーラム2</b> (210教室) ポストトゥルースの時代における教育と政治 — よみがえる亡霊、来たるべき市民 —
18:30 ~ 20:30	懇親会 (コミュニティ アゴラ：1階)

## 09月10日(日)

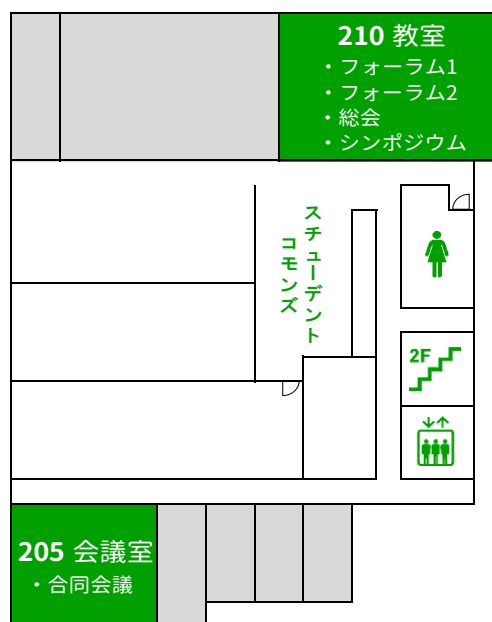
09:00 ~	受付 (エントランスホール：1階)
09:30 ~ 12:30	<b>コロキウム3</b> (301教室) 教育思想史と人間測定テクノロジーの接点
	<b>コロキウム4</b> (302教室) 人間形成論的バイオグラフィー研究の進め方 — インタビューから解読まで —
	<b>コロキウム5</b> (312教室) ポスト基礎付け主義と規範の行方 — 政治と教育から問いなおす —
13:30 ~ 14:15	総会 (210教室)
14:30 ~ 17:30	<b>シンポジウム</b> (210教室) 〈いま〉をどう読み解くか — 教育に向き合うための歴史感覚を問う —

# 会場案内図

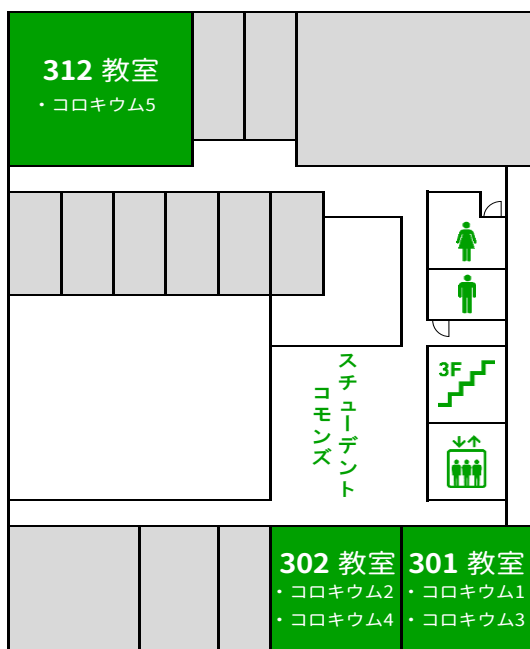
## 1階



## 2階



## 3階



### ⚠ 会場利用に関する注意事項

- \* 教室内での**飲食は禁止**となっております。1階の「コミュニティ アゴラ」、2階や3階の「スチューデント コモンズ」をご利用ください。
- \* **男性用トイレは奇数階のみ**の設置となっております。
- \* 構内は**全面禁煙**となっております。鳴尾駅前の喫煙スペースなどにて喫煙くださいますようお願い申し上げます。
- \* **出入口はオートロック**となっております。
- \* 1階には「授乳室」がございます。

## 思想史と実践史を架橋する — 新教育研究への提案 —

企画者

宮野 尚 (東京学芸大学・院生)、橋本 美保 (東京学芸大学)

司会者

橋本 美保 (東京学芸大学)

報告者

遠座 知恵 (東京学芸大学)、宮野 尚 (東京学芸大学・院生)

指定討論者

江口 潔 (芝浦工業大学)

「実践思想」をどう読むのか (橋本美保「実際の理論化— 看過されてきた実践思想—」『近代教育フォーラム』第25号、2016年、27~30頁参照)。それは、「思想」というものを、体系的な概念構造— 明文化された「テキスト」の次元に留まらず、広く人間の行為 (実践) を生成している精神— 明文化されていない「意識」の次元を含めて理解しようとする試みといったらよいだろう。そのためには、「書かれていること (言動)」から「書かれていないもの (意識)」の存在を証明し「思想」として評価していく必要がある。我々はその作業に挑むとき、「思想史」と「実践史」、双方向からのアプローチが不可欠となることは言うまでもないが、いったい両者はいかにして架橋されうるのであろうか。

このような問題意識を有した時、19世紀末から20世紀にかけて生じた新教育運動は、それに応答する題材として浮かび上がってくる。同時代の多くの実践家の語りは非体系的・非概念的な動態であるが故に、そこには彼らの「意識」が発現されていくプロセスがみとれるだろう。本コロキウムでは、新教育実践家の言動に照射して、そこから「思想」を析出することを試みたい。

## 〈教育思想史〉の誕生(2)

### — ペスタロッチと英米教育思想史 —

企画者・司会者

相馬 伸一 (広島修道大学)、下司 晶 (日本大学)

報告者

椋木 香子 (宮崎大学)、高宮 正貴 (大阪体育大学)

岸本 智典 (作新学院大学女子短期大学部)

指定討論者

眞壁 宏幹 (慶應義塾大学)

「教育思想史」は、19世紀、国民教育の成立期において、教員養成のテキストとして生まれた。そこで示された「教育思想家」の選択と系列化の視点は、今日の私たちの教育思想史認識、さらには教育一般に対する認識にも影響を与えているのであり、その検討は私たち自身の脱文脈化と再文脈化に資するであろう。本コロキウムは昨年の「〈教育思想史〉の誕生—ドイツと日本」に引き続き、以上の課題意識に基づいて企画されている。

今回のコロキウムでは前半で、ペスタロッチの再検討が試みられる。ペスタロッチは西洋教育思想史上最大の「偉人」といっても過言ではないが、コメニウス、ルソー、ヘルバルト、デューイ等と同様に、狭義の教育分野を超えた問題意識や思想の展開がある。本コロキウムでは、これらの再解釈の可能性を探求することで、「教育的な」ペスタロッチ研究の特質と課題をあらためて明らかにしたい。

コロキウムの後半では、イギリス及びアメリカにおける教育思想史テキストの成立が検討される。英米のブラウニング、ブロケット、ペインター、モンロー等によるテキストは明治期の日本にも取り入れられ、日本の教育思想史認識の形成に一定の影響を与えた。また、それらのテキストにおけるペスタロッチの位置づけは、その思想の受容を方向づけたとも考えられる。

指定討論者には、昨年発行された近年最も浩瀚な教育思想史テキスト(『西洋教育思想史』慶應義塾大学出版会)の編者である眞壁宏幹氏を迎え、同氏のコメントを皮切りにフロアの皆さんとも活発な論議を行っていきたい。

## 学校教育における道德教育を再考する — 天野貞祐と高坂正顕の人間観から —

報告者

山田 真由美 (北海道教育大学札幌校)

司会者

西村 拓生 (奈良女子大学)

平成 30 年度より順次実施される「特別の教科 道德」の導入をまえに、現在、小・中学校における道德教育のあり方に大きな関心が寄せられている。周知のように、戦後の道德教育は、個人の内心の問題にいわば踏み込みすぎた「修身科」の反省を背景とした「公民教育」への構想において出発する。戦後まもなく、道德は「個人の道義心の問題」であると同時に「社会に於ける個人の在り方の問題」であるとあらためて定義され、そのうえで「人間の社会に於ける「在り方」という行為的な形態に於てこの両者を一本に統合しようとする」「新公民科」の導入を以て、新しい道德教育は構想されたのである（文部省通達「公民教育実施に関する件」昭和 21 年 5 月）。

戦後道德教育の展開と変遷を踏まえて、本発表が主題とするのは、学校教育における道德教育の充実を主張し、特設「道德の時間」（昭和 33 年）の導入・実現に尽力したといわれる天野貞祐と、その後の道德教育の基軸となる「期待される人間像」（昭和 41 年）の起草をまかされた高坂正顕の、道德教育に関する思想である。これまで批判的に理解されてきたように、彼らが共通に主張したのは、人間の「社会に於ける在り方」のみに関するのでは、道德教育として不十分であるとの立場であった。

本発表では、特に両者がともに生涯カント研究者であったこと、西田幾多郎の思想に関心を寄せていたことの二側面に着目し、思想の基盤としての人間観を明らかにする。なぜ「社会科」では不十分と考えたのか。また、なぜあえて学校教育において道德教育を充実させることを必須の課題としたのか。両者の人間観を検討することで、道德の問題を、モラルや善悪の問題としてではなく、より根源的な人間の自由の問題（彼らの言葉でいえば、人格の自由の問題）として再提起し、学校教育における道德教育について、その今日的な意義と役割をあらためて考察してみたい。

## ポストトゥルースの時代における教育と政治 — よみがえる亡霊、来たるべき市民 —

報告者

小玉 重夫 (東京大学)

司会者

松浦 良充 (慶應義塾大学)

### ポストトゥルース

日本で選挙権年齢が18歳以上に引き下げられた2016年は、世界でも大きな変化が顕在化した1年となった。グローバリゼーションが人々にコスモポリタンオーバーロードを引き起こし(アンソニー・ギデンズ)、それが、異質な他者に対する不寛容や、排斥へのベクトルを生み出した。その結果、イギリスのEU離脱決定や、アメリカでのトランプ大統領の当選など、民主主義が予測不可能な帰結をもたらす事態が続出した。特にトランプ政権の誕生以降、真実にもとづく知のあり方への不信やシニシズムが蔓延しているとの危機感から、ポストトゥルースの時代という言い方が、なされるようになっている。

### 亡霊

しかしポストトゥルースとは、冷戦終焉以降の知的世界をおおってきた反知性主義の別様の言い方であり、必ずしも、2016年の変化を特徴づけるものではない。重要なことは、ポストトゥルースや反知性主義に対して、エビデンスベースの素朴な実証主義を対置することではなく、市民社会に深く根を下ろす反知性主義と向き合い、そこのなかに、来たるべき民主主義の可能性を見いだしていくことではないか。

たとえばジャック・デリダは、冷戦終焉によって自由民主主義が勝利し歴史が終わったとするフランシス・フクヤマの楽観論を批判し、過去の遺物になったかに見える思想が亡霊としていかによみがえるかが、来たるべき未来を暗示していることを指摘した(『マルクスの亡霊たち』)。

### 来たるべき市民のために

そうだとすれば、重要なことは、亡霊を追放するプラトン主義へと退行することではなく、むしろ、亡霊の存在と向き合い、それを来たるべき市民の主体化を促す方向へと組みかえていくことではないか。

本報告では、以上の問題意識から、ポストトゥルースの時代における教育と政治の条件を探ってみたい。



## 教育思想史と人間測定テクノロジーの接点

企画者・司会者

弘田 陽介 (福山市立大学)

報告者

弘田 陽介 (福山市立大学)

上田 響 (株式会社 viv Limited)

中津 功一郎 (大阪城南女子短期大学)

近代の教育思想史は、新たに開発される人間の能力や機能を可視化するテクノロジーとの協働およびせめぎあいによって進展してきている。だが、近年、教育思想の議論は、専門分化の行き過ぎによって、先端科学とは分離され、また教育思想の分野からはそれらを敵視、もしくは無視するような傾向も存在している。そこで本コロキウムでは、実際に脳神経学、医学、心理学、工学分野において用いられている NIRS (近赤外光脳機能イメージング装置)、VR カメラ (装着型動画撮影カメラ)、表情=感情読み取りシステム (表情画像データをディープラーニングによって読み込み感情認識する) をコロキウムの参加者に体験してもらおう。そのような体験によって、文理融合的というのみならず、テキスト/フィールド、リアル/ヴァーチャルといった区分を越えた、教育思想史学ならではの議論や調査を構想することができないかと企画している。また自然と社会、人間と非人間をめぐる B.ラトゥールらの議論も俎上にあげ、その思想史的な含意についても共有していきたい。

## 人間形成論的バイオグラフィー研究の進め方 —インタビューから解読まで—

企画者

鳥光 美緒子 (中央大学)

司会者

野平 慎二 (愛知教育大学)

報告者

藤井 佳世 (横浜国立大学)、鳥光 美緒子 (中央大学)

指定討論者

藤川 信夫 (大阪大学)、森田 伸子

すでに、人間形成論的バイオグラフィーの研究動向についてはわが国でもそれなりに知られている。理論と経験の接続の問題を、理論的に検討するということも、すでに行われている。

重要なのは、一歩足を踏み出すこと、実際に経験的研究を試みること、だろう。

一昨年来、私たちは大学生を対象にインタビューを行い、それを「人間形成」という観点から解読するということを試みている。今回のコロキウムは、その中間報告である。

ドイツ教育学における先行研究が、まずは手がかりになった。問題設定をどうするか、どう調査協力者を確保するか、どのようなインタビュー手法をとるのか、そしてどのような理論的立場、視点から解読するのか。

とはいえ、実際に作業を進めていくにつれて、ドイツの教育学のモデルが確立された既成のモデルではなく、それ自体形成途上のものであることも見えてきた。

今回、大学生を対象に昨年行ったインタビューから、一つの事例を選択し、その同じインタビュー・データを報告者のそれぞれが解読する。そしてその解読をふまえて「人間形成されたとはどういうことであるのか」について、何をいうことができるのか、討議する。その際、理論的な立場のみならず、インタビュー法の具体にかかわる問題もあわせて討議の俎上にのせたい。

経験的データの具体に向き合い、そこから見えてくることをもとに、人間形成という概念の意味を解明していくことの面白さを、来られた方々と共有できれば幸いである。

## ポスト基礎付け主義と規範の行方 — 政治と教育から問いなおす —

企画者

生澤 繁樹 (名古屋大学)

司会者

室井 麗子 (岩手大学)、生澤 繁樹 (名古屋大学)

報告者

玉手 慎太郎 (東京大学)、田畑 真一 (早稲田大学)

市川 秀之 (千葉大学)、生澤 繁樹 (名古屋大学)

指定討論者

山本 圭 (立命館大学)、関根 宏朗 (明治大学)

歴史を通じて政治思想や教育思想は、みずからの理論的意味や枠組みに正統性をあたえ、それを正当化するための「基礎付け」をどこか求めてきた。けれども、たしかに「基礎付け」さえ手にすれば、政治と教育のよさや正しさ、望ましき、あるいはなにを目的や理念とするのかが説明できるというわけではなかった。それどころか、私たちの時代においては「基礎付け」を語ることにそのものがきわめて困難となり、なにかの真理や本質を前提にすることができにくい多元的世界が広がっている。しかし、どんな真理や本質もなく、規範や価値のすべてが多元的におなじ権利をもって争われるとすれば、そのときいったい私たちは、政治と教育のよさや正しさ、望ましき等々をどうやって論じることができるだろうか。

本コロキウムでは、反基礎付け主義の“相対主義”の陥穽におちいるのでもなく、また基礎付け主義の“本質主義”への安易な逆戻りをはかるのでもない「ポスト基礎付け主義」としての道筋を政治思想と教育思想の交差のなかから問いなおし、探りだしてみることにしたい。このもうひとつの道筋への希望や可能性について語るなかで、規範をめぐる「基礎付け」なき世界に諦観することのない、新しい規範の行方を紡ぎだすことを求めていく。当日の司会、報告および指定討論は、おもに政治思想(玉手、田畑、山本)、教育思想(室井、市川、関根、生澤)を研究分野とする研究者に依頼した。政治と教育の重なりを踏まえて幅広く活発な議論を交わすことができればと考えている。

〈いま〉をどう読み解くか  
— 教育に向き合うための歴史感覚を問う —

司会者

岡部 美香（大阪大学）

報告者

本田 由紀（東京大学）

鈴木 晶子（京都大学）

小野 文生（同志社大学）

いまの教育を特徴づける言葉といえば、グローバリゼーション、PISA、コンピテンシー、コミュニケーション力、アクティブ・ラーニング、ICT、人工知能（AI）、PDCA サイクル、evidence-based、ポスト・モダン（ポスト・ポスト・モダン）…などを挙げることができる。では、これらの言葉に彩られる〈いま〉とは、いったい、どこに起源を措定し、どのような過去と差異化された〈いま〉なのか。あるいは、ユートピアであれ、ディストピアであれ、どのような未来への移行を想定した上で規定された〈いま〉なのか。

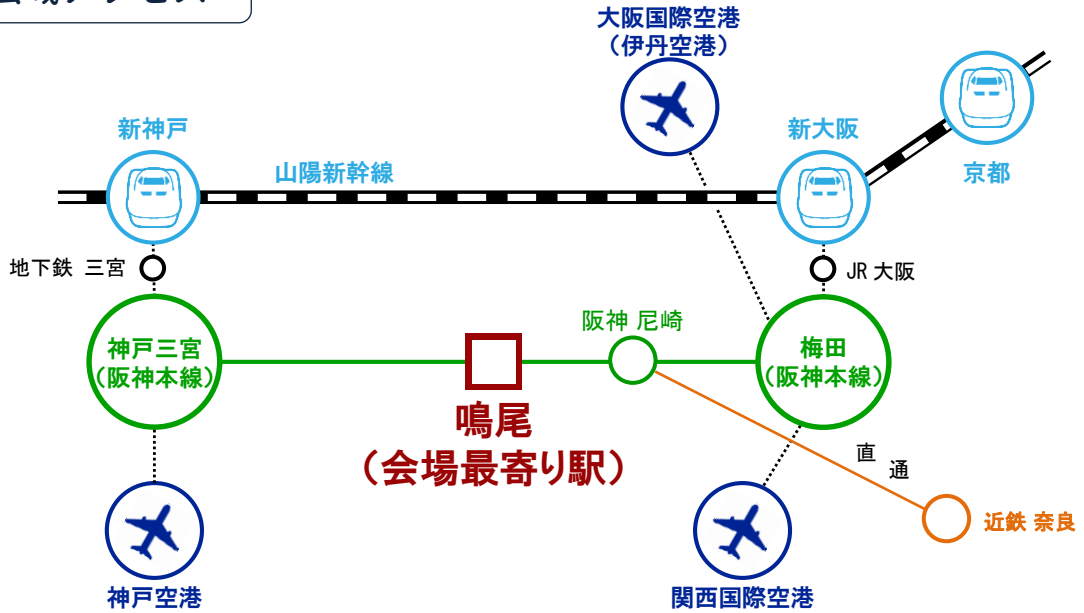
そもそも教育とは、ヒトを一人前の人へと養い育むものとして広く捉えるなら、何らかの共同体のあり様を過去からいまに受け継ぎ、未来へと引き継ぐための社会的な営みであるといえる。また、近代以降の教育は、人を社会化するのみならず、人間を形成することで、過去やいまとは異なる「よりよい」未来の社会をつくるというプロジェクトに加担してきた。だとすれば、過去と未来をどう思い描き、〈いま〉をどう捉えるかという歴史感覚こそが、私たちの教育観を、さらには、私たちが教育について思考し議論する地平をも、その根底において統制し成形しているといっても過言ではないだろう。

そこで本シンポジウムでは、私たちの歴史感覚を省察的に問いながら、〈いま〉の教育を、そしてまた、教育にとって〈いま〉がいかなる意味を有する時なのかを読み解いてみたい。

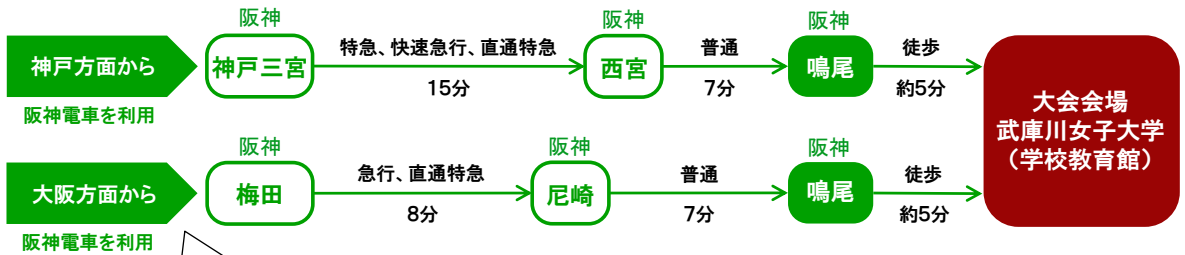
まず、本田氏には、「期待される人間像」から「生きる力」へ、さらに「資質・(能力)」へと、過去半世紀の間に教育政策にかかわる理念や言説がどのように変質を遂げてきたかについて検討していただくなかで、人々に対する権力の視線の〈いま〉を分析していただく。また、鈴木氏には、人間性の根幹を揺るがす問題を提起しつつある情報技術の急激な進展を背景に、科学技術文明の享受と創造を視野に入れつつ、〈いま・ここ〉を生きる人間の時空感覚や自意識、記憶、経験、熟達など教育の根底をなす諸概念の揺らぎについて論じていただく。そして小野氏には、図式／リズムの相克とモデルネなるものの交叉とを思想史的にひも解く一方、パティ・マトス（受苦を通して学ぶこと）という経験の思想に光を当てることで、制度・技術・道具化・方法化・管理などに深く関与する技術的理性に〈いま〉どのように対峙するのかを考察していただく。これらの報告を通して、あまりに多くのことが語られていながらも — 語られているがゆえに —、混迷を極め、十分には捉えきれていない〈いま〉に、さらには、その〈いま〉と結びついた教育にどう向き合えばよいのか、議論する機会を参加者諸氏と共にしたい。

# アクセスマップ

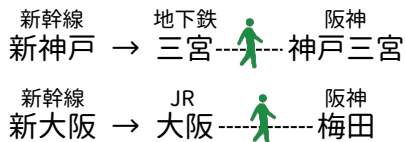
## 広域アクセス



## 大会会場へのアクセス



### 新幹線でお越しの場合



大会会場の周辺は、飲食店の数がかなり限られております。ご参加の際には、**昼食をご持参**くださいますようお願い申し上げます。



## 教育思想史学会 事務局

〒565-0871

大阪府吹田市山田丘 1-2

大阪大学大学院人間科学研究科・岡部美香研究室内

Email : [office@hets.jp](mailto:office@hets.jp)